

幹事長は会の金と昔の動画を
握られ女物の下着で司会させ
られ会員の前でメスに墮とさ
れる

R18

2026・10・5

目次

第1話 幹事長の穴

第2話 報告の前に

第1話 幹事長の穴

「篠原、椅子はこれで全部か」

森下が最後の折り畳み椅子を壁に立てかけて、腰を叩いた。

「全部です、森下さん。助かりました」

誉士は首から下げた名札『幹事長 篠原』の紐のねじれを指で直してから、腰から折って礼をした。

金曜の上映会が終わって、雑居ビル三階の貸しスペースに残っているのは、常連の三人と誉士のほかには、いちばん後ろの列で延長コードを巻いている大野成瀬だけになっていた。

「幹事長、今月のゲストって本当に内田恒一
なんですか」

小西がリュックを片方の肩に引っかけたまま、スクリーンの前で振り返った。

「本当です。月末の特別上映に来ていただきます」

「すげえ。僕、あの人の映画評を読んでこの会に入ったんですよ」

「お前は思ったことを全部口に出すな」

森下が小西の後ろ頭を軽くはたいた。

堤は黙って、誉士のネクタイの結び目から靴の先までを一度眺めた。

「幹事長、今日も最後までお一人ですか」

「会場費の精算が残っていますので。私がやるのが一番早いんです」

「篠原さんがいないと回れませんからね、この会は」

堤のその一言で、誉士の背筋はもう一段伸びた。

三人の足音が階段を下りていく。

誉士は奥の控室に入り、長机に会場費の封筒を置いた。

今月も会場費が足りない。

誉士は自分の財布から札を抜いて、封筒に足した。

誰にも言わない。

言えば皆が気を遣う。

扉が開いた。

「片付け、手伝います」

成瀬が、仕事帰りの作業ズボンと上着のまま、工具袋を肩に掛けて立っていた。

目の高さは誉士より少し低く、肩も薄いのに、まくった袖から出ている手首だけが太い。

「大野。まだいたのか。もう済んだから帰れ」

「その封筒、また自分の財布から入れたんですか」

誉士は掌で封筒の口を押さえた。

成瀬は後ろ手に扉を閉めて、鍵を回した。

カチャン。

「何のつもりだ」

「僕、半年前まで会計補助だったんで。通帳の写し、まだ持ってるんです」

成瀬はスマホを長机に置いて、親指で画面を送った。

会の口座の出入りが映っている。

出ていった先に、篠原誉士の名前が二つ並んでいた。

「会の金が、幹事長の口座に移ってます。これ、森下さんが見たら何て言いますかね。あの、口が悪いから」

「あれは立て替えを戻しただけだ。会場の更新のときに前金を俺が払って、あとで口座から抜いた。足りない月は俺が出してる。出した分のほうがずっと多い。領収書は全部ある、家に。お前も補助をやってたなら分かるだろう。黙ってたのは、言えど皆が気を遣うからで、俺は一円だって——」

「僕は信じますよ」

成瀬は工具袋を床に下ろした。

ゴト。

「領収書を見たことがある人間を、幹事長は半年前に外したんです」

誉士は口を閉じた。

背中を汗が下りた。

「……いくら欲しい」

「金は要りません」

「じゃあ役か。補助に戻してやる。来週の定例会で、俺の口から言う」

成瀬は答えずに、画面をもう一度送った。

暗い部屋の動画が流れた。

枕元から撮った角度で、背中の広い男が、
下にいる肩の薄い男の脚を抱えて腰を振って
いる。

『大野、いいか、入れるぞ』

スマホの中で、誉士自身の声がした。

誉士は首の後ろまで熱くなった。

半年前の、打ち上げの夜。

誉士の部屋。

「止めろ。……いや、それを消す条件を言
え。飲めるものなら飲む」

成瀬は親指で動画を止めた。

次に出た声からは、丁寧な語尾が落ちてい
た。

「次の週、あんた何て言った。『大野くん、会計は私一人で見ますので』だ。みんなの前で、今日と同じ顔でな」

成瀬は長机の端に腰を乗せた。

「俺はあれから半年、いちばん後ろの席であんたの司会を聞いてたんだよ」

「あの夜のことは、悪かった。だが会とは別の話だ」

「詫びなんか要らねえ」

成瀬はスマホを伏せた。

「俺が欲しいのは、あんたの口だ、幹事長。その口に、俺のちんぽを咥えさせる」

誉士は成瀬の顔を見た。

成瀬の右手は、もう自分のベルトの金具に掛かっていた。

「俺は入れる側だ。半年前、お前がいちばん近くで見たろ」

「ケツで覚えてるよ。だから今夜は、あんたが膝をつく番だ」

誉士の右手が上がった。

成瀬は片手でその手首を掴み、長机に押しつけた。

ゴン。

誉士は肩から体重を乗せたが、手首は机から浮かなかった。

工具を握り続けてきた指が、腕時計のベルトごと骨を締めてくる。

「殴るなら、これは今夜のうちに会のグループに流す。嫌なら帰れ。俺は追わねえ」

誉士は長机の封筒を見た。

会が潰れるよりは、口ひとつで済むほうが
まだましだ。

「……今夜は口だけだな」

成瀬は答えなかった。

誉士の手首を放して、靴の先で、自分の足
もとの床の埃を払った。

「会のためだ。お前のためじゃない」

「膝つけ、幹事長」

誉士は背広を脱がなかった。

名札を首から下げたまま、控室の床に片膝
をつき、もう片方もついた。

スラックスの膝の下で、払いきれなかった
埃がざらついた。

紐の先で名札が揺れて、成瀬の膝に当たった。

壁の姿見に、紺の背広の大きな背中が映っている。

その背中では、自分より肩の薄い男のちんぽの前で丸くなっていた。

誉士は鏡から目を逸らした。

成瀬が長机から腰を上げて、ベルトを外した。

ジ、とファスナーが下りる。

下着の合わせから出てきたちんぽは、もう半分硬くなっていた。

皮が半分かぶった先が、誉士の鼻のすぐ前で重そうに垂れている。

一日働いた汗と小便の匂いが、誉士の鼻にまっすぐ来た。

「せめて洗ってこい。流しならそこにある」

「一日ぶんの匂いごと啜えろ。口開けろ」

誉士は歯を食いしばった。

成瀬の親指が、誉士の下唇を押し下げた。

指は機械油の匂いがした。

「ほら。さっき小西に内田さんの話をしたときみたいに、大きく」

誉士は口を開けた。

成瀬は自分の指で皮を根元へ引いて、むき出しにした亀頭を誉士の舌に乗せた。

しょっぱい。

熱い。

皮の内側に溜まっていた匂いが、口の中いっばいに広がった。

ヌプ。

「ン」

「歯、当てんな。唇で包め」

誉士は唇をすぼめた。

舌の上で、ちんぽがぐっと太くなった。

口の中で他人のちんぽが硬くなっていくのが、舌の付け根まで伝わってくる。

さっきまで垂れていた物が、上あごを押し上げるほど反り返った。

ジュプ。

ジュ、ジュプ。

「グ、ツ、フ……」

「下手くそだな。……いいよ、それで。上手かったら腹が立つ」

成瀬はちんぽを口から抜いて、濡れた竿を
誉士の頬に押しつけた。

ペチ。

唾で光ったちんぽが、頬骨の上を滑っていく。

ペチ、ペチ。

成瀬は竿の重みで、誉士の頬を右、左と叩いた。

亀頭の先が鼻の頭をこすって、ぬるい汁の筋を残した。

「下もだ。金玉、舐めろ」

「一日機械をいじった股だぞ。……客先に出せる匂いじゃない」

「半年ぶん溜まってんだ。全部あんたの口で抜く」

成瀬はちんぽを自分の腹のほうへ持ち上げて、袋を誉士の口の前に垂らした。

毛の生えた皮が、汗で湿っている。

蒸れた匂いが、さっきより濃い。

誉士は目をつぶって、舌を出した。

レロ。

塩辛い。

舌の上で、玉が皮の中をぬるりと逃げた。

縮れた毛が一本、舌の先に貼りついた。

「片方、口に入れろ。吸え。舌で転がせ」

誉士は唇を開いて、金玉をひとつ口に含んだ。

チュ、ポ。

ジュル。

「ン、フ……ッ」

誉士の肩の横で、成瀬の太ももの筋が硬くなった。

頭の上から、ちんぽの先の汁が一滴、糸を引いて誉士の額に落ちた。

「ン、毛が……口に、入る……ッ」

「飲んどけ。あんたの司会より、今の音のほうがずっといい」

成瀬はもう片方の金玉も誉士の口へ押し込んだ。

二つは入りきらない。

頬が内側から膨らんで、唇の端から唾が垂れた。

ジュポ。

ジュル、ル。

「ン　ン　……ッ、フ、グ……」

成瀬は袋を引き抜いて、竿の根元を誉士の鼻の下に当てた。

「根元から先まで。舌、べったりつけろ」

誉士は舌を平らにして、根元から舐め上げた。

血管の浮いた竿が、舌の上をゆっくり通っていく。

レロ、オ。

先まで行くと、割れ目から汁が垂れて、舌に落ちた。

「もう一回、咥えろ。今度は自分で奥までだ」

誉士は亀頭を唇で咥え直した。

ジュプ。

成瀬の手が、誉士の耳ごと頭を両側から挟んだ。

短い髪は指に掛からず、硬い掌が頭の骨をじかに締めてくる。

「舌、裏に当てろ。そう。そこを舐め上げろ」

誉士は言われた場所に舌を這わせた。

裏筋が舌の上でびくりと跳ねた。

先から、ぬるい汁がにじんできた。

苦い。

ジュル。

チュプ。

「ッ、ン、フ……」

「いい面だ。森下さんに礼を言ってた口が、俺のちんぽで塞がってる」

成瀬が踵を浮かせて、ちんぽを押し込んできた。

ズプ。

亀頭が上あごをこすって、喉の入り口に当たった。

「グ、ォ……ッ」

誉士の目に涙がにじんだ。

成瀬は引いて、また押し込んだ。

グポ。

ジュボ。

グボ。

唾が唇の端からあふれて、顎を伝い、ネクタイの結び目に落ちた。

次の一滴は、胸の前で揺れている名札の『幹事長』の字の上に落ちた。

成瀬の金玉が、突かれるたびに誉士の顎を叩いた。

ペチ。

ペチ。

「ン、グ、ン ツ……」

誉士は成瀬の太ももを両手で掴んだ。

押し返すつもりだったのに、指は作業ズボンの布を握りしめて、自分の顔のほうへ引き

寄せていた。

誉士の股で、ちんぽが重くなっていた。

スラックスの前が、内側から押し上げられている。

——嘘だろ。

誉士は腰を引いて、背広の裾で隠そうとした。

成瀬が顎を引いて、誉士の股を見下ろした。

「幹事長。前、張ってんぞ」

成瀬がちんぽを引き抜いた。

ヌポ、と音がして、唾の糸が唇から亀頭まで伸びた。

誉士は咳き込んで、床に片手をついた。

「ゲホ、ッ、これは、朝から何も出してないからだ。三十四にもなれば、疲れてる日ほどこうなる。お前だって男なら分かるだろう。それより時計を見ろ、鍵は十時までに一階の早川さんへ返す決まりなんだ。俺は一度だって遅れて返したことがない。早川さんにも、鍵は篠原さんに預けておけば安心だと言われている。月末の内田さんの回だってそうだ。編集部に三度断られて、四度目は本人の講演の出口で菓子折りを持って待って、やっと取りつけた。あの人が来るのは、俺が幹事長だからだ。その俺が、こんな床で、こんなことで——」

誉士は嘘をついた。

今朝も出勤の前に、風呂場で一度出している。

「喋ってると歯が当たらなくていいな」

成瀬は誉士の後ろ頭を押さえて、開いたままの口にちんぽを戻した。

ズブ。

今度は喉の入り口で終わらなかった。

グポッ。

「オ、ゴ……ッ」

喉の肉が、亀頭の形に押し広げられた。

息ができない。

鼻の先が、成瀬の下の毛に埋まった。

汗の匂いがいっそう濃い。

「ハ……」

成瀬の息が、初めて乱れた。

「喉、締まる。あんた、舌よりこっちのほう
が使える。奥が亀頭に吸いついてくる」

グポ。

ゴポ。

ジュポ。

成瀬は誉士の頭を前後に動かして、喉を穴
にして使った。

引かれるたびに、喉の粘膜が亀頭のくびれ
に引っかかって、めくれそうになる。

押し込まれるたびに、胃の入り口まで空気が
押し戻された。

グェ、とえずく音が、ちんぽで塞がった口
の端から漏れた。

誉士の鼻から、鼻水が垂れた。

涙が頬を下りて、唾と一緒に顎から落ちた。

「ン、ゴ、オ、ン ツ……ゴ、ブ、オ
ツ……」

苦しい。

苦しいのに、スラックスの中のちんぽは、喉を突かれるたびに下着の布へ先を擦りつけていた。

先から漏れた汁で、下着の前がもう冷たい。

誉士は横目で姿見を見てしまった。

鏡の中の男は、背広の襟を唾で濡らして、口いっぱいにちんぽを詰められたまま、腰をへこへこと前へ振っていた。

ホールの入口の扉が開く音がした。

スニーカーの足音が、まっすぐ控室へ近づいてくる。

コン、コン。

「幹事長？ 小西です。傘忘れちゃって」

誉士は息を止めた。

成瀬の腰は引かなかった。

根元まで入れたまま、腰で円を描いて喉を押し回している。

グチュ。

ゴボ。

「……あれ。幹事長、なんか変な音しません？」

成瀬がかがんで、誉士の耳に口を寄せた。

「返事してやれよ、幹事長」

ちんぽが亀頭だけを残して抜かれた。

誉士は唇でその先を咥えたまま息を吸い、それから口を離した。

「ッ、ハ……小西くん。流しの、排水が詰ま
りまして。いま、大野くんに見てもらって
います。傘は、ホールの傘立てに」

「あ、大野さんまだいたんですね。ていうか幹
事長、声ガラガラですよ。風邪ですか」

成瀬の親指が、誉士の口の端にねじ込ま
れた。

開かされた口に、ちんぽが根元まで戻っ
てくる。

グポッ。

「ンッ……！」

「うわ、また鳴った。すごい音しますね、その排水」

「詰まりが深いんですよ」

成瀬が扉に向かって、いつもの丁寧な声で答えた。

「奥まで通さないと抜けないんで。もう少しかかります」

「了解っす。僕、傘探してますね」

足音がホールの奥へ離れていった。

成瀬はちんぽを抜かないまま、誉士の顔を上に向けさせた。

「扉の外には『大野くん』。中じゃ『大野』。……営業は呼び分けがうまいな」

「ン、グ……ッ」

「まあいい。外ではそう呼んどけ。そのかわり中じゃ、この喉は俺が使う」

成瀬の親指が、誉士の喉仏を外から撫でた。

皮膚の下で、ちんぽの先が指を押し返した。

「ここまで入ってる」

成瀬は親指を喉仏の下へずらして、外から強く押した。

喉の内側で、亀頭が指と粘膜のあいだに挟まれた。

成瀬はそのまま腰を浅く引いて、押して、自分の指に自分のちんぽを擦りつけた。

ゴリュ。

ゴリュ。

「ゴ、ォ ……ッ、ン、グ……ッ、ォ、
ゴ……」

誉士は答えられなかった。

鼻で吸う息が、ヒュ、と鳴った。

スラックスの中で、ちんぽが大きく跳ねた。

成瀬の手が、誉士の頭を掴み直した。

「出すぞ。全部飲め。こぼしたら背広に付く」

グポ、グポ、グポ、グポ。

速い。

喉のいちばん狭い所を、亀頭が続けざまに叩く。

突かれるたびに鼻が成瀬の下腹に潰されて、汗で湿った毛が鼻の穴に入った。

胸の前で名札が跳ね回って、成瀬の膝を叩いている。

ちんぽが喉を出入りする音が、扉の向こうに届きそうなほど大きい。

ゴポ、グポ、ゴポ。

「ン、ン、ゴ、オ、ブ、フ　ッ……」

「幹事長。目」

誉士は涙でにじんだ目を上げた。

成瀬が見下ろしていた。

眉を寄せて、下唇に歯を立てて、誉士の顔だけを見ている。

成瀬の下腹が誉士の鼻を潰したまま、いちばん奥で動かなくなった。

「ハ、　ッ……」

ビュルッ。

ドク。

ドク、ドク。

熱い精液が、喉の奥に直接当たった。

量が多い。

飲まなければ息ができない。

ゴク。

ゴク、ン。

誉士の喉が動くたびに、舌の上でちんぽが脈を打ち、また新しい精液が流れ込んできた。

飲みきれなかった分が鼻の奥へ逆流して、塩素に似た匂いが頭の中まで抜けていく。

ゴク。

ドク、ドク。

その精液が胃に落ちたとき、誉士の腰が跳ねた。

「ン　ン　ッ、ゴ、ブ……ッ、フ、ン
——ッ！」

触ってもいないちんぽが、下着の中で脈を打った。

ビュク。

ビュク、ビュク。

スラックスの中に、自分の精液が広がっていく。

熱い。

止められない。

誉士はちんぽを咥えたまま、成瀬の太もものにしがみついて、腰をカク、カクと前に突き出した。

何もない空中を突いている。

突くたびに亀頭が濡れた布にこすれて、また出た。

ビュ、ルツ。

ビュク。

「ン、フーッ、フーッ……ン、グ、ウ……ツ、ン、オ……ツ」

誉士は下着の中へ全部出した。

太ももの付け根から膝の裏まで、ぬるい精液が伝った。

ケツ穴まで、ひくついていた。

成瀬はすぐには抜かなかった。

「まだ管に残ってる。頬すぼめて吸い出せ」

誉士は頬をすぼめた。

チュ、ウ。

ジュル。

管の中に残っていた精液が、舌の上にとろりと出てきた。

さっきより濃くて、苦い。

ゴク。

「先もだ。舌で拭け。汚れたまましまわせる気か」

誉士は震える舌で、亀頭の周りをぐるりと舐めた。

くびれの溝に、精液の残りが白く溜まっている。

レロ。

チュプ。

戻りかけた皮の内側にも、舌の先を差し入れた。

「ン ……フ、ツ……」

出したばかりの誉士のちんぽは、舐めるたびに下着の中でまだ跳ねていた。

「上手い。飲めって言われて飲んで、拭けって言われて拭く。頼まれると断れねえんだな、あんたは」

成瀬が、亀頭のくびれを誉士の唇に引っかけながら腰を引いた。

ヌボ。

誉士は床に両手をついて、肩で息をした。

口の中に、まだ味が残っている。

舌の奥に、毛が一本貼りついたままだ。

成瀬はしゃがんで、誉士のスラックスの前を見た。

紺の布に、濃い染みが広がっていた。

「……出したのか。俺、指一本触ってねえのに」

「鍵を、返しに行く」

誉士は手の甲で口を拭って、長机に掴まって立った。

会場費の封筒を背広の内ポケットへ押し込む指が、唾で滑った。

膝に力が入らない。

下着の中で、精液がぐちゃりと動いた。

成瀬はファスナーを上げてベルトを締め、
長机のスマホを上着の胸ポケットに落として
から、誉士の背広の裾を、染みが隠れるよう
に下へ引っ張った。

「早川さんの前に、そのズボンで立つのか」

成瀬は工具袋を肩に掛け直してから、鍵を
回して扉を開けた。

ホールの入口で、小西が折り畳み傘を振っ
ていた。

「あ、ありました、傘。……幹事長、膝、真
っ白ですよ。両方」

誉士は自分の膝を見た。

スラックスの両膝に、床の埃が丸く付いて
いる。

「排水口を、覗いていたものですから」

「幹事長がですか？ 大野さんの仕事じゃ」

小西は首をかしげて、誉士の顔を覗き込んだ。

「あと、口の横になんか付いてます。白いの。名札も濡れてるし、顔、真っ赤ですよ。なんか生っぽい匂いもするし、やっぱ排水って臭いんですね」

誉士は口の横を親指でこすった。

指に、成瀬の精液がぬるりと残った。

「幹事長にも手伝ってもらったんですよ」

後ろから、成瀬が丁寧な声で言った。

「喉の奥まで、よく通りました」

成瀬は誉士の背広の肩に付いた埃を払って、小西にも聞こえる高さで続けた。

「幹事長。来週の定例会、着る物は僕が持っています」

第2話 報告の前に

土曜の午後一時半、雑居ビル三階の控室。

誉士は姿見の前でネクタイを締め直していた。

紺の背広の上着は、椅子の背に掛けてある。

長机の上には会計報告の原稿と、首から下げる紐つきの名札『幹事長 篠原』が置いてあった。

扉の向こうのホールでは、パイプ椅子を開く音が続いている。

「森下さん、そこ一列多いですって」

「いいんだよ小西、余ったら荷物置きにしろ」

常連の声は今日もよく通る。

——『来週の定例会、着る物は僕が持っていくます』

この一週間、現場を回っていても、あの声が耳から抜けなかった。

先週の金曜、誉士はこの部屋の床に膝をついて、ちんぽを喉まで突っこまれて、飲んだ。

触られてもいないのに、スラックスの中へ出した。

思い出すと、今でも顎の付け根がだるい。

ノックもなしに扉が開いた。

「お疲れさまです、幹事長」

成瀬は作業ズボンに上着のまま、工具袋を肩に掛けて入ってきた。

午前的一件、修理を回ってきたらしい。

袖口に、乾いた水垢が白く付いている。

成瀬は後ろ手に鍵を回した。

カチャン。

「鍵はやめろ。二時には始める」

「開けっぱなしで着替えますか。僕は構いませんけど」

成瀬は工具袋の口から小さな紙袋を出し、中の物を原稿の上に置いた。

黒いレース。

成瀬の掌に収まるほどの、女物の下着だった。

「これを履いてください。背広の下に」

誉士は動揺して、鼻で笑いそこねた。

「大野。冗談なら会のあとで聞く」

成瀬は椅子を引かず、長机の角に尻を乗せた。

空の紙袋を握り潰す手の甲に、筋が浮いている。

丁寧な語尾が、そこで落ちた。

「遊びで三軒も回るかよ。昨日、休みを一日つぶしたんだ。三軒目で店員に、彼女さんのサイズはって聞かれた。腰回り九十って答えたら黙られたよ。レジじゃ袋を二重にされた」

誉士は原稿を引き抜いて脇へ置き、レースを机の上に落とした。

「領収書を寄越せ。俺が持つ」

「財布はしまえ。俺が恥かいて買った物を、あんたが履くんだ」

成瀬はレースを指でつまみ上げ、もう一度、原稿の上に乗せ直した。

「あの台の前で喋ってる間、ズボンの中は俺が選んだ物だ」

誉士は口を開けたまま、次の値段が出てこなかった。

十二年、相手の欲しい物に値をつけて、持ち帰らせてきた。

領収書を突き返す相手に、出せる見積もりが無い。

成瀬は潰した紙袋を作業ズボンのポケットへ押し込んだ。

レースは机に置いたままだ。

上着の胸ポケットから、スマホの角がのぞいている。

「……二時に始める。それだけだ」

誉士は声に出して言い、ベルトを外した。

スラックスは皺にならないよう、畳んで長机に置いた。

ボクサーパンツも脱ぐ。

ワイシャツの裾とネクタイと靴下だけの格好で、誉士は黒いレースに足を通した。

細い紐が、厚い腰の肉に食い込む。

前の三角の布は、ちんぽを半分しか隠さない。

金玉は両脇からこぼれた。

レースの網目が、亀頭の裏にざらついている。

「サイズが合っていない。女物だぞ」

「売り場でいちばんでかいのがそれだ」

成瀬は机から下りて、誉士のまわりを一周した。

「毛がはみ出してる。ケツは半分も入ってねえな」

硬い指が、尻の肉に埋まった紐を一度すくって、離した。

パチ。

「ッ」

誉士は原稿をつかんで、股の前に下ろした。

三角の布が、内側から持ち上がりかけている。

「紐がきついんだ。血が止まる」

成瀬は何も言わずに、原稿の上から指で弾いた。

ピン。

紙ごと、ちんぽの先が揺れた。

「グ」

「原稿でちんぽを隠すな。鏡の前に立て。頭から、本番の声で読め」

成瀬は原稿を取り上げて、誉士の胸に押しつけた。



姿見の前に立つと、成瀬は誉士の真後ろに回った。

背は誉士のほうが高いので、鏡の中では肩の上に成瀬の目だけが出ている。

右腕が腰骨の上から前へ回ってきた。

袖から出た手首は誉士のより一回り細いの
に、指は締めたレンチのように硬い。

機械油と石鹼の匂いがする掌が、レースの
上からちんぽを包んだ。

「グ」

「読め」

「……本日は、お忙しい中、お集まりいただき、
ありがとうございます」

ザリ。

掌が、布ごと下から上へ擦り上げた。

網目が亀頭の縁に引っかかる。

「ッ、フ」

誉士は紙に目を戻した。

「シネマ・サロン、定例会を、始めます」

ザリ、ザリ。

「まず、会計の、ご報告から」

右手の指が輪になって、レース越しに竿の根元を締めた。

そのまま先まで絞り上げる。

ズリュ。

「ン　ッ」

誉士の膝が内側へ寄った。

ちんぽはもう三角の布に収まっていない。

亀頭が上の縁から顔を出しかけて、紐がそれを押し戻している。

原稿を持つ手が、ちんぽを隠すほうへ下がった。

成瀬の左手が、その手首を紙ごと胸の高さへ押し戻した。

「本番じゃ台の下だ。客からは見えねえ」

「……今月の、会場費は、前月と、同額で」

成瀬の親指が、布の上から亀頭の割れ目を探り当てた。

クリ、クリ。

「グ、ウ」

「プロジェクターの、ランプの、交換が、一件」

クチ。

音が変わった。

先走りがレースに染みて、親指の腹がぬめりはじめている。

成瀬は濡れた親指を、誉士の顔の前の鏡に押しつけた。

指の跡が、ガラスの上で光って残った。

「先週は喉だけで出した男だ。手だとどこまで保つか、見に来た」

成瀬は左手も前へ回して、こぼれた金玉を下から掬った。

硬い指が、二つをまとめて揉む。

グニ、グニ。

「フッ、ン、ン、ン」

原稿の端が震えて、字が読めない。

右手は網目の一つを亀頭の先に合わせ、そこから肉を搾り出すように握った。

ギュ、ヌチ。

黒い糸の格子が、赤く張った亀頭に食いこんでいる。

格子から盛り上がった肉を、成瀬の親指の爪がそっと搔いた。

カリ、カリ。

「ン　ッ、フ、ウッ、爪、を、立てるな」

先走りがまた一粒、格子の目から押し出されて、爪の先を濡らした。

金玉を放した左手が、ワイシャツの上を這い上がってきた。

ネクタイの脇で、指が布ごと乳首をつまむ。

ギュ。

「ン　ッ、胸は、原稿と関係ないだろ」

「あの台の前で張ってる胸だろ。俺は用がある」

硬い指の腹が、シャツ越しに乳首を潰して
転がした。

コリ、コリ。

下では右手が、濡れた布を竿に巻きつける
ようにして扱っている。

ヌチ、コリ、ヌチ、コリ。

「フ、ン、ン、ッ」

誉士の腰が、掌のほうへ一つ出た。

「厚い胸のくせに、ここだけ薄皮だな」

成瀬はシャツのボタンを一つ外し、指をじ
かに入れた。

機械油の匂いの指先が、立った乳首の先を爪で弾く。

ピン、ピン。

「ン　ッ、ン　、フウッ」

弾かれるたびに、レースの中でちんぽが跳ねて、成瀬の掌を下から叩いた。

誉士は歯の間から息を逃がした。

乳首とちんぽの二か所を同じ拍子でいじられて、割れた腹筋が波打つのが鏡に映っている。

鏡の中で、ワイシャツにネクタイを締めた男が、黒いレースの前を濡らして立っている。

後ろから回った手が、その濡れたところを握って上下している。

ヌチ、ヌチ、ヌチ。

「続き」

「ス、スクリーンの、張り替えは、ッ、来期に。来期に、見送、り、クウッ」

声が上へ跳ねた。

自分でも聞いたことのない高さだった。

ドン、ドン。

扉が叩かれた。

「篠原、声が裏返ってるぞ」

森下だった。

誉士は息を止めた。

握った掌は離れない。

親指は、濡れたレースごと亀頭の裏筋を撫で続けている。

「風邪か。マイクの音、上げとくか」

「……いえ、大丈夫です、森下さん」

ヌル。

「ッ、発声を、やっています。私の原稿は、長いものですから」

「長えのは毎度だろうが」

扉の向こうで森下が笑った。

親指と人差し指が、裏筋の結び目を布ごとつまんで揉んだ。

クニ、クニ。

誉士は唇を巻きこんで噛んだ。

鼻から、細い息が漏れる。

「フ、……ッ」

「早くしろよ。堤がもう一番前に陣取ってる」

ヌチュ。

「は、い、すぐに」

足音が遠ざかった。

誉士は息を吐いた。

吐き終わる前に、扱く掌が速くなった。

ヌチュ、ヌチュ、ヌチュ、ヌチュ。

「オ`」

腹の底から、歯で止められない声が出た。

「今の『私』、よかった」

成瀬の息が、うなじにかかった。

「ハ」

成瀬の腰が、後ろから押しつけられた。

作業ズボンの前が、硬く張っている。

それがレースの紐一本しか通っていない尻の割れ目に、縦にはまった。

ゴリ。

「グ、オ」

「あんたが戸越しに敬語を使った、あれ一本でこれだ」

成瀬は腰を上下に揺すった。

厚い生地の出っぴりが、紐ごとケツ穴の上を擦っていく。

ズリ、ズリ、ズリ。

前に逃げれば濡れた掌、後ろに逃げれば布越しのちんぽ。

誉士の腰は、どっちへ引いても成瀬に当たった。

「ン、オ、尻に、当てるな」

「入れやしねえよ、今日は。前だけで、どこまで鳴くか聞く」

成瀬は揺するのをやめ、作業ズボンの前の出っぴりを、割れ目のいちばん深い所へ押しこんだ。

ファスナーの金具が、紐の上からケツ穴に当たる。

冷たい。

グリ、グリ。

「ホ、オッ、金具、金具が」

ケツ穴が、冷たい金具の下ですぼまった。

「締まったな。ここはあとだ」

ヌチュ、ズリ、ヌチュ、ズリ。

成瀬の左手が、腰の後ろで紐をつかんだ。

上へ引く。

ギチ。

「ヒ、ギッ」

レースが股に食いこんだ。

前の布が金玉を二つに割り、後ろの紐がケツ穴にじかに噛みつく。

誉士はかかとを浮かせた。

鏡の中で、爪先立ちになった厚い体が、後ろの男の拳一つに紐で吊られている。

割られた金玉が、布の両脇から赤くはみ出していた。

「オ`、オ`、切れる、紐が、切れる」

「縫い目は三軒とも引っぱって確かめた」

成瀬は紐を引いたまま、右手で先だけを責めた。

布からはみ出した亀頭を、濡れた掌の真ん中で磨くように回す。

クチュクチュクチュクチュ。

「ホ、オ、オ、ッ、先、先ばっか、ン、オ」

先走りが糸を引いて、姿見の前の床に落ちた。

ポタ。

「ホ、オ、待て、大野、待て」

誉士は原稿を握った手で、鏡の枠をつかんだ。

「二時だ、二時に始まるんだぞ。背広はこれ一着で来た、替えなんか持ってきてない。終

わってからにしろ、会がはねたら残ってやる、椅子も俺が一人で片付ける。飯も出す、駅前焼肉でいい、上でも特上でも好きなだけ食べ。月末の内田さんの回の受付、お前に任せてもいい、名刺だってもらえる、あの人は雑誌に書いてる人だぞ」

鏡の枠が、握った手の中で軋んだ。

「だから、ッ、中はやめろ。布の中に出したら、ン、染みる、紺でも染みは浮くんだ。最前列は堤さんだぞ、あの人は鼻が利く。外せ、せめてこれを下ろせ、流しに出す、流しなら水で落とせる、オッ」

喋っている間じゅう、腰が成瀬の掌へ向かって前に出ている。

誉士はそれを止められなかった。

成瀬の手は緩まなかった。

「でもそれ、見積もりだろ。焼肉だの受付だの、俺に値段つけてるだけだ」

紐を引く拳が、もう一段上がった。

ギチチ。

「ンッ、ホ、オッ」

「脱ぎたきゃ、頭を下げて頼め。ホールの連中にじゃなく、俺に。そしたら俺の手で脱がせて、流しまで連れてってやる」

誉士は奥歯を噛んだ。

取引先にも職人にも下げてきた頭だ。

こいつにだけは下げない。

「……頭なら、今日はもう売り切れた」

「じゃあ、中だ」

成瀬の左手が紐を放して、金玉を上へ押し上げた。

右手が竿を根元から握り直す。

グチュ、グチュ、グチュ、グチュ。

濡れたレースが、亀頭の縁を一回ごとに削る。

ザリュ、ヌチュ、ザリュ、ヌチュ。

「オ、オッ、ホ、オ。やめ、布が、ン
オ、擦れ、る」

成瀬の顎が、誉士の肩に乗った。

鏡の中で、目だけが誉士のちんぽを見下ろしている。

押し上げられた金玉が、硬い掌の上で縮んで、竿の根元に貼りついた。

「出る、出るから、手を、クウ、ウツ」

声がまた上へ逃げた。

「報告の前に、パンツの中へ全部ぶちまけろ」

親指が、布の上から鈴口を押し潰した。

グリ。

「ン、イッ、ヒイイツ」

森下に笑われたのより、まだ高い声だった。

腰が跳ねた。

ドブ。

レースの内側に、熱い精液が塊で当たった。

ドブ、ドプッ、ドク。

「ヒ、イツ、ホ、オ、オ」

三角の布がふくらんで、網目から白い精液がにじみ出る。

亀頭の裏で、出したばかりのザーメンが布に押し返されて、竿を伝って金玉まで流れた。

成瀬は手を止めない。

出している最中のちんぽを、精液ごと握って扱き続けた。

グチャ、グチャ、グチャ。

「クヒッ、もう出てる、出てるんだ、大野。ホ、オ、先っぽ、やめろ、そこは今、アッ」

成瀬の掌が、布の上から亀頭だけを包んで、固い蛇口をひねるように回した。

グチュリ、グチュリ。

出したばかりの先が、網目と精液にまみれて削られる。

「イッ、ィ、回すな、ホォッ、腰が、腰が抜ける」

ビュ、ビュク。

薄い二度目が、成瀬の指の間から押し出された。

誉士は両膝を折って、鏡に額をついた。

最後の一筋が、布の脇から漏れて太ももの内側を伝った。

鏡が、誉士の息で白く曇っている。

成瀬はようやく手を抜いた。

指の股に、白い糸が張っていた。

「こっち向け」

誉士は鏡から額を離して、振り返った。

足がもつれて、姿見の枠に肩をぶつけた。

黒いレースの前は、白く濁って重く垂れ下がっている。

萎えかけたちんぽが、濡れた網目の向こうに透けていた。

網目から押し出された精液が、玉になって太ももの毛にからんでいる。

匂いが上がってきた。

青臭くて、生ぬるい。

先週、自分の喉に流しこまれて飲んだのと同じ匂いだった。

「量が多いな。一週間、自分で抜かなかったのか」

「……仕事が詰まっていた」

風呂場で握りかけるたびに、この部屋の床を思い出して手を離した。

「現場が忙しい男のザーメンは濃いんだな。覚えとく」

成瀬は濡れた手を上げて、誉士の目の前で指を開いた。

白い糸が、指と指の間でゆっくり切れた。

その手が、レースの腹の縁から中へ入ってきた。

「ッ、おい」

グチュ。

萎えかけたちんぽと金玉を、溜まった精液ごと掌でかき回す。

ヌチャ、ヌチャ、ヌチャ。

「ン、フ、ウツ、もう、空だ」

「黙って股開いてろ。隅まで塗ってやる」

指が金玉の裏を通り、股の下をくぐって、
尻の割れ目まで白いものを引いていった。

紐の食いこんだケツ穴の上に、ぬるい精液
が塗りつけられる。

ヌリ、ヌリ。

「ホ、オッ、そこは」

穴の縁が、指の腹の下でひくついた。

指は入ってこない。

縁を一周なぞって、抜けた。

成瀬は残りを、レースの尻の側へ塗りつけた。

「重いな、これ」

成瀬は腰の紐をつまんで引き、離した。

パチン。

濡れた布が、ちんぽと金玉に貼りついた。

グチュ。

誉士は流しの脇のティッシュ箱へ手を伸ばした。

箱は先に、成瀬の手に取りられた。

「拭きたきゃ、言い方がある」

誉士は成瀬の顔を見た。

腹を空かせた男が皿を待つ目で、誉士の口だけを見ている。

誉士は口を結んだ。

頭は下げなかった。

「……時間だ」

誉士は長机のスラックスを取った。

ボクサーパンツは、成瀬がもう工具袋にしまっていた。

足を通して、引き上げる。

冷えはじめた精液が、レースとスラックスの間で潰れた。

ヌチャ。

金玉の裏から内腿まで、一步も動かないうちから粘ついている。

成瀬がベルトの端を取って、穴に通した。

ボルトを締める手つきで、いつもより一つ奥の穴まで引く。

腹が締まって、レースの中の物がまた動いた。

「ッ、フ」

成瀬は乳首の上で開いていたシャツのボタンを留め、椅子の背から紺の上着を取って、誉士の肩に着せた。

それから名札の紐を広げて、誉士の首に掛けた。

『幹事長 篠原』が、ネクタイの上に下がる。

「幹事長、二時です」

口調が戻っていた。

「僕は端の席で聞いています」

カチャン。

鍵が開いた。



ホールには会員が二十人ほど座っていた。

誉士は司会台まで歩いた。

ヌチ、ヌチ。

一歩ごとに、金玉の裏で精液が鳴る。

聞こえているのは自分だけだと、誉士は腹に力を入れた。

台に原稿を置く。

端が握った形に折れていた。

最前列の真ん中に森下がいて、その隣に堤、後ろに小西がいる。

壁際の端の席に、成瀬が膝を揃えて座っていた。

「本日は、お忙しい中、お集まりいただき、
ありがとうございます」

さっき鏡の前で読んだ行だ。

声は出た。

裏返らなかった。

「シネマ・サロン、定例会を始めます。ま
ず、会計のご報告から」

堤が、鼻の前で掌をぱたぱた振った。

「幹事長、なんか匂いますね。生臭い」

誉士は原稿から目を上げなかった。

「……控室の流しでしょう。古いビルですの
で」

森下が椅子の背にもたれた。

「排水がこんなにイカ臭えかよ。篠原お前、裏で魚でもさばいてたのか」

ホールに笑いが起きた。

小西が後ろの列で腰を浮かせた。

「幹事長、先週も膝を汚してましたよね。今日はなんか、顔も赤くないですか」

誉士は台の縁を両手で握った。

首から下がった名札が、台の角に当たって鳴る。

スラックスの中で、ぬるい精液が太ももの内側を膝の裏へ下りていく。

堤はまだ、鼻の前の手を下ろさない。

「奥の部屋は扉が閉まってますよ。台の、そっち側からです」

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01054794.html

奥付

作品名 幹事長は会の金と昔の動画を握られ
女物の下着で司会させられ会員の前でメスに
墮とされる

サークル タビューヘ

発行日 2026・10・5

レーティング R18